

## 日本に在住する難民を知る ーミャンマー難民の語りを通してー

○ 東邦大学医療センター佐倉病院 高橋 智美 (7042)

キーワード：多文化ソーシャルワーク、ライフストーリー、難民

### 1. 研究目的

日本では毎年1,000人を超える人々が難民申請しているが、難民認定審査に長期の時間を費やし、認定数も低い。また難民認定申請中は、利用できる医療・保健・社会福祉サービスはほとんどなく、難民認定されても自分たちの権利や利用できる制度について知る機会もほとんどない。さらに我々は難民という人々に目を留めることも少なく、こうした実態自体を知らないことが多い。本来であれば、積極的に関わるべき社会福祉分野においても難民というマイノリティの福祉は、見過ごされてきたと言える。

こうした実態を踏まえ本研究では、ミャンマー難民・難民認定申請者から、ミャンマーでの生活や難民としての来日後の様相を彼ら自身の言葉を通して語りを聴き、生活の実情を知ることを第一の目的とする。その中で「暮らし」、「こころ」、「福祉」に焦点を当て、彼らや信念、思いを見出し、福祉観や日本の医療、福祉制度への考えについての語りを丁寧にくみ取る。そして我々が彼らを支援し社会福祉サービスを考える上での、視点の持ち方を考察することを目的とする。

### 2. 研究の視点および方法

東京都内に住む5名のミャンマー難民・難民認定申請者に聞き取りを行ない、ミャンマーや日本における暮らしの様相、精神的な問題の捉え方や対処方法、日本の福祉制度の利用や思いについて、日本語・ミャンマー語の通訳を介して聞き取りを行なった。難民へのアクセスは個人的には非常に難しいため、通訳をキーインフォーマントとして、選定を依頼した。聞き取りの時間は平均1回約2時間13分、4名には2回、1名には1回の聞き取りを行なった。彼らの暮らしや文化、医療、福祉などに関して、自由に語ってもらう形をとり、ICレコーダーで録音し逐語記録を作成した。

### 3. 倫理的配慮

聞き取り調査では、対象者に調査説明書（ミャンマー語に翻訳したもの）を使用して研究内容、公表等について十分説明し、署名により同意を得た。また、断っても不利益にならないこと、一旦了承した後でも断ってもよいことを説明した。聞き取った内容は、個人が特定されないよう改変し、研究のためのみに使用し、厳重に管理を行なっている。

#### 4. 研究結果

発表では、聴き取りから得られた語りを紹介する。

「暮らし」について、家族とは国が離れていても繋がりを持ち続け、寺への寄進などを通して仏教を信仰し、母国での生活を引き継いでいくが日本の文化に触れ変容も見られる。日本では難民であるがゆえの様々な不安定さや差別、将来に対する不安感を抱いているものの、母国での迫害や恐怖と比べ、日本の生活の中に自由や安心感を見出していた。

「こころ」に関しては、特に生活上の問題としては、言葉、金銭面、文化の違いなど、多くのストレスを感じているが、ミャンマー人同士で付き合いを持ち、欲をなくすなど仏教の信仰の中に心の安定を求めている。また、こころの問題には強いスティグマが残っている。最近になって病いと捉えるようになったが、原因を前世の行ないや医学的見地の双方から捉えている状況である。

「福祉」については、ミャンマー人同士での金銭面も含めた助け合いが、自然な形で行なわれている。保険未加入や金銭などの制限により日本の医療福祉サービスは利用しにくく、または制度を知る機会や教える場所がないことが課題となっているが、こうした綿密な制度を享受できることを肯定的に捉える面も見られている。

#### 5. 考察

我々が持つ思考と彼らの文化や思想に基づく概念は大きく違う。彼らを理解する際にその多様性に敏感になり、丁寧に彼らの語りを聴くことが重要である。

医療行為一つを取ってみても、彼らが病気をどのように捉え、どのような理由で医療にかかろうと思うのかに我々は留意しなければならない。我々が難民に対する認識や態度を変容させていく土台があってこそ、彼らの文化に根差した使いやすい制度、サービスを考慮していくことができ、同時に彼らの中でも変容が見られ、スティグマを消していくことができると思う。

さらに難民には、辛い経験やプライドもあり「語ること」自体の苦難があり、それは難民として日本で生活することの苦難の表現と理解する必要がある。語りを聴いていく作業のうちには、こうした「語りづらさ」の中に意味を見出し、また「語られなかったこと」にも留意する必要がある。

そして難民を、「困難を抱えた人」としてだけでなく、生活者の視点から見て、困難を乗り越える主体として捉える必要がある。全面的に支援を差し伸べるのではなく、自らを支える「強さ」に力を添えることを考え、彼らが評価する、日本独自の良さを活かせるようなサービスや支援体制を構築していくことが望まれる。